

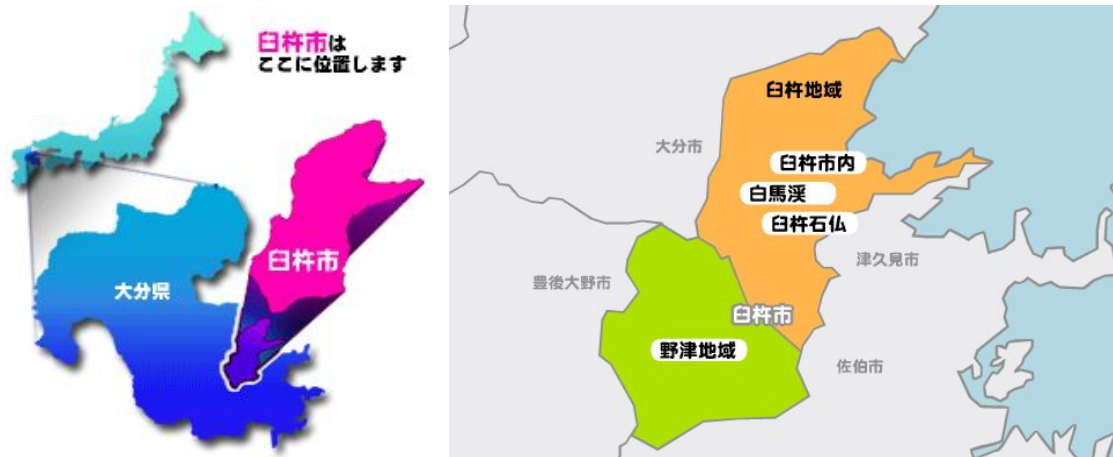
事例番号 143 守り創る暮らしと交流(大分県白杵市)

1. 背景

大分県東南部に位置する白杵市は、白杵湾に注ぐ 3 つの河川が合流したところにてきた狭隘な沖積平野を中心に、背後の険しい山稜も含む人口約 4 万 5 千人の市である。戦国時代は水軍の拠点として防備の要をなし、府内(現、大分市)を拠点とする大友宗麟が白杵湾最奥部の島に白杵城を築いた。江戸時代には稲葉氏が入り、埋め立てを行いつつ町の規模を拡大していった。白杵は海上交通の拠点として商業が大いに栄えたが、近代以降は大分市の中心性が高まったことから白杵の経済活動は衰退に向かった。

白杵市の市街地は城下町の町割りを今でもよく残しており、昭和 30 年代までは伝統的建築もよく残されていた。白杵は石仏が昔から有名であったが、観光地としては広く認識されておらず、宿泊施設も整っていない状況であった。地元の人たちも歴史的町なみを価値あるものとしてはあまり認識していなかった。

そうした中、近年になって道路整備や商店街の近代化が進み、その過程で失われる町なみが出てきた。また、最近では中心市街地の人口が激減しており、空き家となる伝統的建築物も多くなってきた。このような傾向に危機感を抱いた一部の人々が伝統的町並みを保全すべく立ち上がったところから、今日につながるまちづくりの活動が始まった。



白杵市の位置(左)と白杵市の市域(右) (資料:白杵市ホームページ)

2. 目標

1999 年に策定された白杵市中心市街地活性化基本計画では、「まちななか」の将来像として次の 3 つを掲げている。

- ① 暮らしやすい場としての「まちななか」
- ② 魅力ある交流の場としての「まちななか」
- ③ 市民が守り創る「まちななか」

この「暮らし」「交流」「守り創る」が今日に至るまでの臼杵市のまちづくりの基本的視点になっているが、このような「まちななか」をつくるために次の7つの基本方針が掲げられている。

- ① 潤い・憩い・ゆとりのあるまちづくり
- ② 臼杵らしい歴史・文化を生かしたまちづくり
- ③ 人が住みたくなる中心部のまちづくり
- ④ 情報が行き交い観光客が滞在できる便利な施設があるまちづくり
- ⑤ みんなが安心していける商店街づくり
- ⑥ 寄りつきやすい商店街・まちづくり
- ⑦ お客のニーズにこたえられる商店街づくり

⑤～⑦は商店街の置かれた状況を示しており、①～④がまちづくりの具体的方向を示している。

3. 取り組みの体制

市民、市民組織、商店街、行政、大学等の連携により、臼杵市の歴史・伝統の保全と創造的まちおこしへの取組とが行われている。



臼杵市中心部地図 (資料:臼杵市観光情報協会ホームページ)

4. 具体策

(1) 地域資源の再発見

臼杵市のまちづくりは、地域資源を再発見するところから始まった。すなわち、自分たちのまちは発展から遅れているという「近代化」の旧来の発想を脱し、古いものに価値があるという考え方に転換したことが、その後のまちづくりを推進するためのおおもとの原動力となった。

1975年に臼杵市青年会議所の高橋薫氏らが「臼杵の美しい町なみを守る会」を発足させ、住民アンケートなどを実施しつつ景観保護に向けて活動を開始した。そしてその活動を通じて歴史的景観を守ることこそがまちづくりになるとの意を強め、1981年に会の名称を「臼杵の歴史景観を守る会」に変更し、1983年に「全国町なみゼミ」を臼杵に招聘して大会を開催した。この大会により臼杵の歴史的町なみが全国にアピールされるとともに、臼杵の人々の間にも歴史的町なみを大切にすゝる気持ちが広がった（「守る会」は1999年にも「全国町なみゼミ」を招聘している）。そして1984年に「町並み保存調査専門委員会」ができ（臼杵市の「地域経済活性化実施計画策定委員会」の専門委員会）、それに対応する形で同年市役所内に「町並み保存基本計画調査プロジェクトチーム」が立ち上がった。

1985年には（財）観光資源保護財団（日本ナショナルトラスト）の調査対象に臼杵市が選ばれ、調査の結果、臼杵市には歴史的町並みがよく残っていることが判明した。そして町の価値を再認識するプロセスから、町並み保全を観光の活性化につなげて経済を活性化させたらどうかという考え方も出てきた。

(2) 歴史的・文化的資産の保全

1987年に臼杵市が「臼杵市歴史環境保全条例」を制定し、同年、「臼杵デザイン会議」を発足させた。これにより景観保全のための活動の土台ができあがった。1991年には同条例の施行規則が施行され、これに基づいて歴史環境保全地域内における建築物等の修景（新築、改築）に対し補助金が交付されるようになった（「臼杵市歴史環境保全事業」）。

1988年度からは臼杵市が「地域経済活性化緊急プロジェクト計画」の一環として以下の歴史的建造物を保全し施設整備をする事業を実施した（～1989年度）。

「山下通り歴史公園整備事業」

（旧武家屋敷「丸毛家住宅」を買収、修復して1990年から一般公開）

「大手門通り歴史公園整備事業」

（旧臼杵藩主別邸を買収、1991年から「稲葉家下屋敷」として有料公開）

また1991年度～1994年度においては市が「二王座歴史の道整備事業」を実施した。これは歴史的景観がよく残る市道八町26号線を「二王座歴史の道」と名付けて整備したものである。この事業において、沿道建造物の買収・修復・公開（稲葉家土蔵休憩施設、旧真光寺休憩施設）、街路美装化（臼杵特産の灰石による石畳化）、電線類の地中化が行われた。

1997年からは毎年11月に「竹光芸まつり」が行われるようになった（第4回から「うすき竹宵（たけよひ）」に改称）。発端は市長の発案であった。企画・運営は当初は臼杵市役所内の若手まちづくりグループ「未来（みら）くる会」が担い、後に中央通り商店街青年部や商工会議所青年部が参画した実行委員会が担うようになった。祭の内容は、竹ぼんぼりを街路等に設置して城下町を照らし

出すというもので、竹を自然に返すエコロジー的側面も持っている(使用された竹は竹炭にされる)。



二王座歴史の道(旧真光寺:二王座切通し) (写真提供:白杵市、以下の写真も同じ)



「うすき竹宵」まつり 二王座歴史の道



「うすき竹宵」まつり 白杵城跡「大門櫓」



「うすき竹宵」まつり 横町通り



「うすき竹宵」まつり 般若姫行列

さらに 1998 年度～2006 年度には「街なみ環境整備事業」が、2002 年度～2010 年度には「身近なまちづくり支援街路事業」が実施されている。

(3) 保全から創造へ

以上のように、街並み整備の面では伝統的な環境を重視するまちづくりが行われてきたが、その一方、商業活性化の面では発想の転換がやや遅れた。1987 年 3 月に審議会から市長に提出された「臼杵市特定商業集積整備基本構想」（「特定商業集積の整備の促進に関する特別措置法」に基づく）はいまだ大規模商業集積施設整備を前提とするものであったことから、結局事業は実施に至らず、考え方の見直しが求められるようになった。そして 1998 年に中心市街地活性化法が施行されたのを機に、1999 年度に中心市街地活性化基本計画「臼杵のまちなか活性化基本計画」（2000 年 3 月）が策定された。その基本方針は前記のようなものであるが、整備の方策と行動目標には次の 4 つを掲げている。

- ① 「拠点」づくり / ② 「担い手」づくり
- ③ 「分担・協働」体制づくり / ④ 「ネットワーク」づくり

ハードとソフトとをうまくつなげてまちを活性化させるという基本的な考え方がうかがえるが、臼杵市のまちづくりは実際にその方向で新たな展開を見ることになる。商店街としては、中央通り商店街の老朽化したアーケードを 2002 年に撤去し、通りの通称を従来の「シルバーロード」から「八町大路」に変更し、通りの石畳美装化や店舗の修景助成事業（大分県補助事業）を行なっている。



八町大路(本町:中央通り商店街)

2003年度には臼杵市の「町並みスローライフ」調査・体験事業が「全国都市再生モデル調査」に選定された。その調査の趣旨は、「歴史的な建築物を単に鑑賞するだけでなく、積極的に活用することにより交流の促進を図りたい」と考え、「伝統的建築物の多目的利用」について調査することであると説明されている。あわせて「城下町臼杵に住む価値を再認識」すること、「スローライフ体験プログラムで新しい「観光」を考察」することも調査の目的であるとされている。そして、同調査では「町並みスローライフ」（「臼杵流スローライフ、スローフード再発見」）の体験事業が「町並みタウンライフ・ツーリズム」（「ローカルタウンツーリズム」）の確立も視野に入れつつ実施された。つまり、同調査の主眼は新たなタイプの「ツーリズム」モデルをつくることに置かれたが、そのねらいは単なる観光の振興ではなく、内外に向けて「新しいライフスタイル」の発信をすることにあった。

具体的には、2つの「モデルケース」を設定した体験事業を行った。ひとつは、「臼杵の生活を体験し暮らす」新しい「宿」のモデルケースである。これは、伝統的建築物の多目的利用の方策を探るためのものでもあった。体験施設として選んだのは、旧武家屋敷「丸毛家住宅」である。被験者にそこに宿泊してもらい、宿泊施設、生活拠点としての可能性を探ろうというわけである。もうひとつは、「臼杵の生活を体験し暮らす」プログラムのモデルケースである。寺院での座禅体験、地産地消のスローフード体験等を組み合わせたスローライフ体験プログラムにより、新しい観光のあり方を模索しようというものであった。



黄飯



臼杵ふぐ料理

これらの実験事業においては、立命館アジア太平洋大学(APU)の学生の協力を得た。APUは2004年4月に別府市に開設された新しい大学で、世界中から大勢の留学生が集まっていることが特徴である。そのような留学生を含む学生に臼杵のスローな生活を体験してもらい、国際的な視点で臼杵の新しい魅力を引き出す方策を立案しようとしたわけである。そして、体験実験の結果、日本家屋の良さや竹宵まつりの良さ、ゆったりとした生活の良さが再認識され、臼杵の建築物、ライフスタイルが観光資源に十分なり得ることがわかった。それに関しては参加者からさまざまな提言が行われ、その内容は「APU公開講座」という形で臼杵市民にも発信された。

調査においては、既存建築物の有効活用のあり方についても検討が行われ、次のような改修プランが改修概算額とともにまとめられた。

〔公共建築物〕

旧臼杵藩稲葉家下屋敷 → 研修・宿泊施設

旧平井家住宅 → 憩い・お休み処

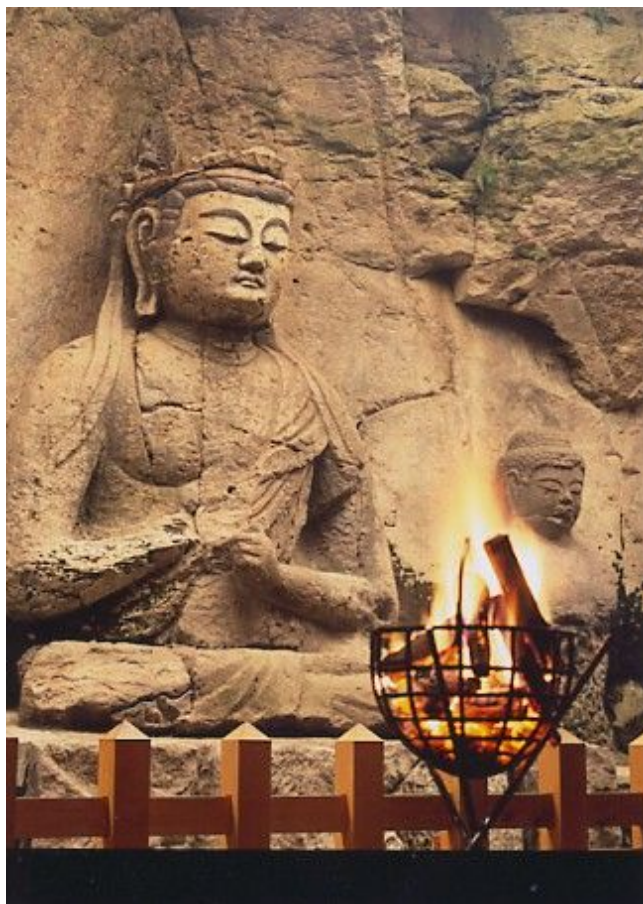
〔民間建築物〕

武家屋敷 → 宿泊施設

町家 → 宿泊施設、南蛮レストラン(スローフードレストラン)

土蔵 → ギャラリー、アトリエ等

以上のような臼杵市の取り組みは、2004年6月に認定された「地域再生計画」でさらに総合的に実施されることとなった(2004年度から約5年間の計画)。計画の名称は「スローライフと地場産業と観光の融合による日本の正しいふるさとづくり」であり、①地場産業の活性化(造船業、醸造業、臼杵カボス)、②臼杵流のスローライフ、スローフードの再発見(ローカルタウンツーリズム等)、③“日本の正しいふるさと”づくり(地域資源を守り活かし、臼杵らしさを大切にする)を組み合わせ、地域を活性化しようとする内容になっている。そして具体策としては、スローライフ体験プログラム開発事業、カボス園地の荒廃園対策、ケーブルテレビ等による「ローカルタウンツーリズム」に対する市民との情報共有化・市外への情報発信等が掲げられている。



国宝臼杵磨崖仏(石仏火祭り、深田)

5. 特徴的手法

「意識改革」→「環境整備・保全」→「資源活用のためのプログラム開発」という形で、まちづくりのレベルを着実に引き上げてきている点が大いに評価される。特に、多くの学生を受け入れてまちづくりのあり方を実証実験する等、そのプロセスそのものがまちの内外の交流を高めるという目的の実現にもなっている点は、今後のまちづくりのあり方を考える上で示唆するところが大きい。

6. 課題

学生との交流をきっかけに APU には「臼杵プロジェクト」が学内に発足し、さらに臼杵市との交流が深まっている。将来的には総合的地域学としての「臼杵学」を共同でつくり上げ、それをまちづくりに活かしていくことが望まれている。そのためにも、調査の結果まとめられた施設整備に関する提言を着実に実現していくことが必要であり、また、臼杵の魅力を維持・保全・PR するためのシステムの開発とそれに関わる人材の育成が必要である。

(参考・引用文献)

臼杵市ホームページ

地域再生本部ホームページ

都市再生本部ホームページ

日廻文明「新しい“タウンツーリズム”をめざして」(『新都市』2004 年 12 月号)

伊藤滋編著『都市再生最前線』ぎょうせい、2005 年

(社)日本経済調査協議会編『未来をひらく都市再生』ぎょうせい、2004 年

『造形』no.31(2001 年 2 月号)、建築資料研究社

佐藤滋+城下町都市研究体編著『図説 城下町都市』鹿島出版会、2002 年